東北大学一般選抜前期日程志願者における現役・浪人の経年変化

石井 裕基，倉元 直樹（東北大学）

近年少子化の急速な進行が社会問題となる中，18 歳人口減少への対応は各大学の志願者数確保という側面からは大きな課題である。一方，志願動向は様々な要因によって左右されるのが現実である。本研究では，東北大学における一般選抜前期日程の志願者数の 27 年間の経年変化について，現役生と浪人生別に解析し，志願者数の動向を分析した。その結果，志願者数がほぼ横ばいで推移する時期と大きく変化する時期とがみられた。動向が変化する時期は入試制度の変更と連動しており，現役生と浪人生が異なる動きを見せる場合があることが分かった。

1 はじめに

1.1 少子化と志願者数及び受験者数の変化

少子化が急速に進行する中，2022 年の出生数は 80 万人を割り込み 799,728 人となった（厚生労働省，2023）。また，中央教育審議会大学分科会（2023）によると，1992 年に 205 万人いた 18 歳人口は 2022 年には 112 万人と 93 万人減少し，2040 年には 88 万人まで減少すると推計され，さらに年々増え続けていた大学進学者数は 2022 年に 64 万人となったが，2040 年には 51 万人と 2022 年の 80%の規模に減少すると推計されている。

このように大学入試を取り巻く環境は大きく変化しているが，一方で大学入試センター試験及び大学入学共通テスト（以下，「共通試験」という）の志願者数及び受験者数の推移（図 1）は，18 歳人口の減少（中央教育審議会大学分科会，2023）に比例して単調に減少しているわけではない。増加と減少を繰り返しながら 1997 年度入試で 60 万人存在していた志願者数は 2023 年度入試には 51 万人と 9 万人減少し，受験者数は 55 万人から 47 万人と 8 万人減少している。このように長期的に見れば，1997 年度入試に比べ 2023 年度入試における志願者数は 85%，受験者数は 86%の規模となっているが，2003 年度から 2006 年度入試と 2018 年度入試以降は大きな減少期があり，2007 年度から 2018 年度入試まではほぼ横ばいとなっている。

このような現象は個別大学の志願者数や受験者数の動向にもみられるのか，東北大学を事例に分析した。こうした現状分析は，今後の受験者獲得方針を検討する上での参考資料ともなりうるものと考える。本稿ではその分析結果について報告する。

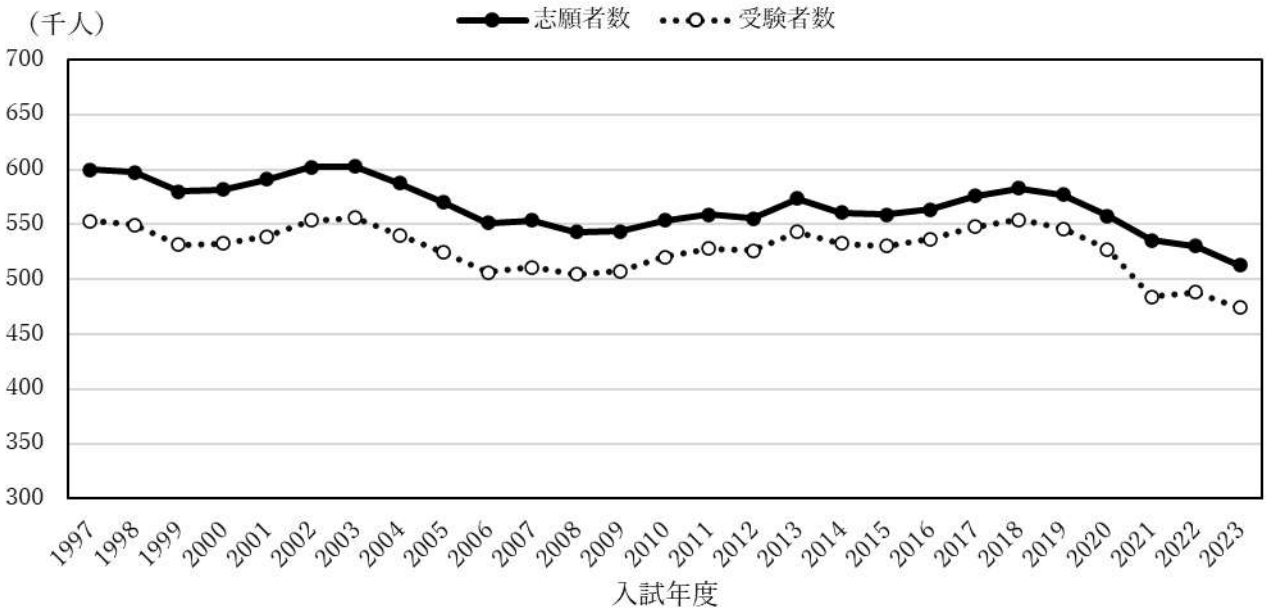

図 1 共通試験の志願者数と受験者数の推移

2 方法

2.1 分析対象データ

2.1.1 東北大学志願データ

本研究では東北大学入試課に電子情報として保管されている 1997（平成 9）～2023（令和 5）年度入試の一般選抜 [1]前期日程の志願者数データを用いた。ただし，医学部保健学科の募集は 2004（平成 16）年度入試以降のため，医学部保健学科のデータは除いている。これを「東北大学志願データ」と呼ぶ。

本研究の分析は「国立大学法人東北大学個人情報保護規定」に基づき，入試センター長の許可のもと行っている。

2.2 分析方針

最初に，東北大学志願データから全体の動向について把握を試みた。次に，現役生と浪人生の動向比較，1 年目と 2 年目以上の浪人生の動向比較を試みることで，それぞれの動向の特徴や違いを浮き彫りにした。

以降，1 年目の浪人生を「1 浪生」，2 年目以上の浪人生を「多浪生」と呼ぶ。

2.2 計算ソフト

Microsoft 社の EXCEL を用いて分析を行った。

3 東北大学志願データと共通試験との関連

図 2 は，1997 年度入試から 2023 年度入試までの東北大学志願データの経年変化について示したグラフである。

1997 年度から 2002 年度入試までほぼ横ばいで推移しているが，2002 年度から 2006 年度入試まで 1,286 人（2002 年度に対し 21.3%）減少した。同様に，2006 年度から 2018 年度入試までほぼ横ばいで推移しているが，2018 年度から 2023 年度入試まで 946 人（2018 年度の 19.1%）減少した。

このように志願者数全体の推移から，2 度の「安定期」（1997 年度から 2002 年度入試，2006 年度から 2019 年度入試）と，2 度の「減少期」（2002 年度から 2006 年度入試，2019 年度以降）があることが分かる。

2 度の「減少期」にどのような入試環境の変化があったのか主なものを以下に挙げてみる。

2003 年度入試：定員 100 人減（教育学部 10 人減，法学部 50 人減，工学部 40 人減）
2005 年度入試：共通試験の科目数増
5 教科 5 科目から 5 教科 7 科目に
2006 年度入試：共通試験に英語リスニング導入
2021 年度入試：大学入試センター試験の廃止
大学入学共通テストの開始

最初の「減少期」では，定員減や科目数の増加が志願者数の減少に影響を与えていたようである。また，2 度目の「減少期」では，「共通テストの試行調査で明らかになった新傾向問題の極端な変化が嫌忌され，その出題傾向がセンター試験に前倒しで出題されることが予想されたため，早くから共通試験の受験を回避する行動」（内田・橋本，2022: 15）が，東北大学の志願者数の減少にも影響を与えていたようであり，2023 年度入試もその影響が続いていることが分かる。

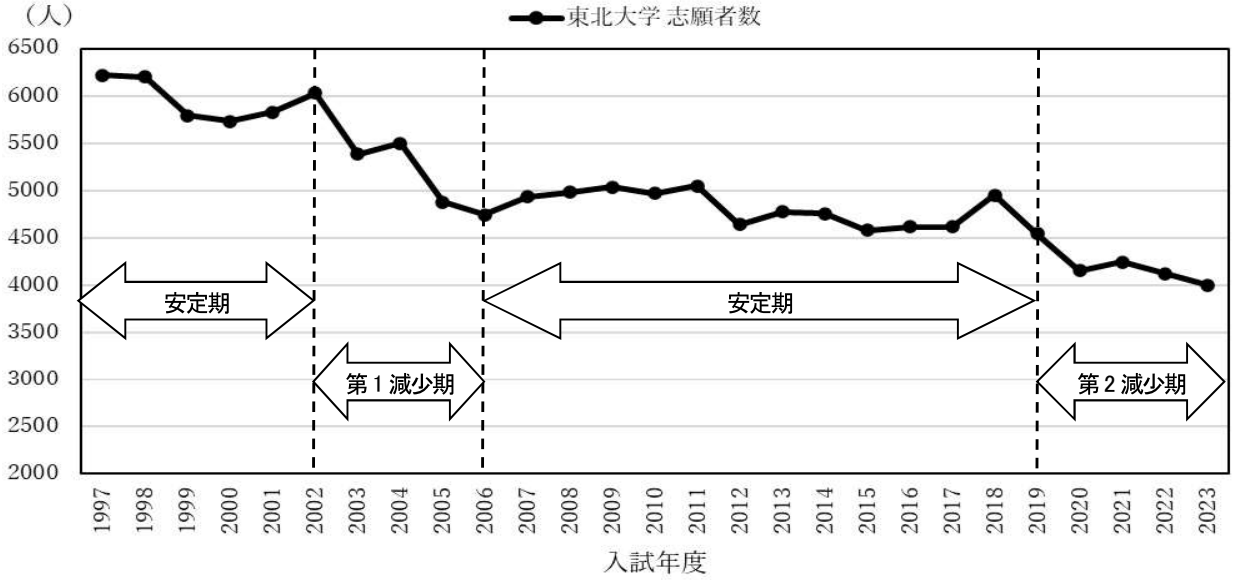

図 2　東北大学志願データの経年変化

4 現役生・浪人生別志願者数割合の経年変化

4.1 現役生の割合が増加傾向

表 1 は，東北大学志願データの年度ごとの全志願者数に対して，現役生と浪人生が占める割合を男女別に計算したものである。

表１　全志願者数に現役浪人の占める男女別の割合

入試年度	現役生			既卒生		
	男	女	合計	男	女	合計
1997	47.5%	13.5%	61.1%	32.1%	6.8%	38.9%
1998	47.5%	13.6%	61.1%	32.0%	6.9%	38.9%
1999	47.2%	14.4%	61.6%	31.5%	6.9%	38.4%
2000	48.8%	14.0%	62.8%	30.5%	6.7%	37.2%
2001	48.4%	13.9%	62.2%	31.2%	6.6%	37.8%
2002	47.6%	13.6%	61.2%	31.7%	7.1%	38.8%
2003	44.8%	14.0%	58.9%	33.6%	7.5%	41.1%
2004	45.9%	14.0%	59.9%	32.7%	7.5%	40.1%
2005	48.8%	14.0%	62.8%	30.3%	6.9%	37.2%
2006	49.7%	16.3%	66.0%	27.6%	6.4%	34.0%
2007	51.2%	15.6%	66.7%	27.3%	5.9%	33.3%
2008	51.8%	15.7%	67.5%	26.7%	5.8%	32.5%
2009	53.5%	16.0%	69.4%	25.0%	5.5%	30.6%
2010	53.5%	16.9%	70.4%	24.3%	5.3%	29.6%
2011	52.6%	18.1%	70.7%	24.2%	5.2%	29.3%
2012	54.2%	16.9%	71.1%	23.0%	5.9%	28.9%
2013	52.4%	16.2%	68.6%	25.0%	6.4%	31.4%
2014	48.9%	16.8%	65.8%	28.3%	5.9%	34.2%
2015	51.8%	17.0%	68.8%	25.4%	5.8%	31.2%
2016	51.4%	17.5%	68.9%	24.9%	6.2%	31.1%
2017	51.6%	16.8%	68.4%	25.2%	6.4%	31.6%
2018	51.2%	18.3%	69.5%	24.5%	6.0%	30.5%
2019	49.9%	16.6%	66.6%	26.5%	6.9%	33.4%
2020	53.7%	17.1%	70.8%	23.6%	5.7%	29.2%
2021	55.8%	17.8%	73.6%	21.3%	5.1%	26.4%
2022	56.4%	19.0%	75.4%	20.0%	4.5%	24.6%
2023	54.6%	20.0%	74.5%	20.2%	5.2%	25.5%

1997 年度入試には現役生の占める割合 61%に対し浪人生の占める割合は 39%であったが，2023 年度には現役生 75%に対し浪人生は 25%となっている。現役生と浪人生の割合比で見ると，1997 年度入試には 3：2 であったが，2023 年度入試には 3：1 となり，現役生の割合が増え浪人生の割合が減っていることが分かる。とくに，浪人生男子の割合は，1997 年度入試で 32%であったものが，2023 年度入試では 20%と 12%の減である。

このように，現役生の占める割合が増加し，浪人生の割合が減少しているが，浪人生の割合にターニングポイントとなる時期が見られる。例えば，2003 年度は 41%と前年より 2%増加したが，2004 年度から年々減少し 2012 年度には 29%となっている。また，2014 年度や 2019 年度も同様の傾向が見られる。

4.2 入試制度変更で現れた 4 つの波

次頁の図 3 は，入試年度ごとの全志願者数に占める現役生と浪人生の割合の差を「（現役生の割合）－（浪人生の割合）」で計算した数値と志願者数の推移を示したグラフである。

1997 年度入試では 22%の差であったが，2023 年度入試では 49%の差と 27 年間で倍増している。しかしこの間の変化は必ずしも差が単調に増加してきたのではなく，増加と減少を繰り返しながら波のように変化しており，4 つの波に分けることができる。そして，これらを分ける谷となってる 2003 年度入試，2014 年度入試，2019 年度入試の時期には入試制度に関わる大きな変更があった。

4.2.1　2003 年度入試の谷

東北大学の入試では，2003 年度入試で前期日程の入学定員を減らし [2]，2005 年度入試で共通試験に課す受験科目数を 2 科目増加（多くの大学で 2004 年度入試から導入）した。そして，2006 年度入試では，2003 年度から施行された新しい学習指導要領の内容で共通試験が実施され，さらに英語にはリスニングテストが導入された。なお，共通試験の旧課程履修者に対する経過措置は 2006 年度入試のみであった。

2007 年度から 2009 年度入試にかけては後期日程が廃止 [4] され，前期日程の定員が増加した。

4.2.2　2014 年度入試の谷

2013 年度から新しい学習指導要領が高等学校で施行されたが，数学と理科のみ 2012 年度からの先行実施であった。そのために 2015 年度入試の共通試験で

は数学と理科が新しい内容で実施された。なお，共通試験の旧課程履修者に対する経過措置は 2015 年度入試のみであった。

4.2.3　2019 年度入試の谷

2019 年度入試の場合は，最後の大学入試センター試験となった 2020 年度入試から新傾向問題の「出題傾向がセンター試験に前倒しで出題されることが予想された」（内田・橋本, 2022: 15）年であり，2021 年度入試から大学入学共通テストが開始された。

以上のように，これら 3 つの谷は，次の 4 つの入試制度の変化と重なっている。

①定員の増加減少
②受験科目数の増加
③学習指導要領の改訂による出題内容の変化
④入試制度変更とそれに伴う出題傾向の変化

特に，図 2 で表れた 2 度の「減少期」にあたる 2003 年度入試と 2019 年度入試は，前年度に比べ志願者数が大幅に減少した年であり，さらにグラフの中の波の様子からは，その後数年間にわたり浪人生に対する現役生の割合が急速に増加していることが分かる。

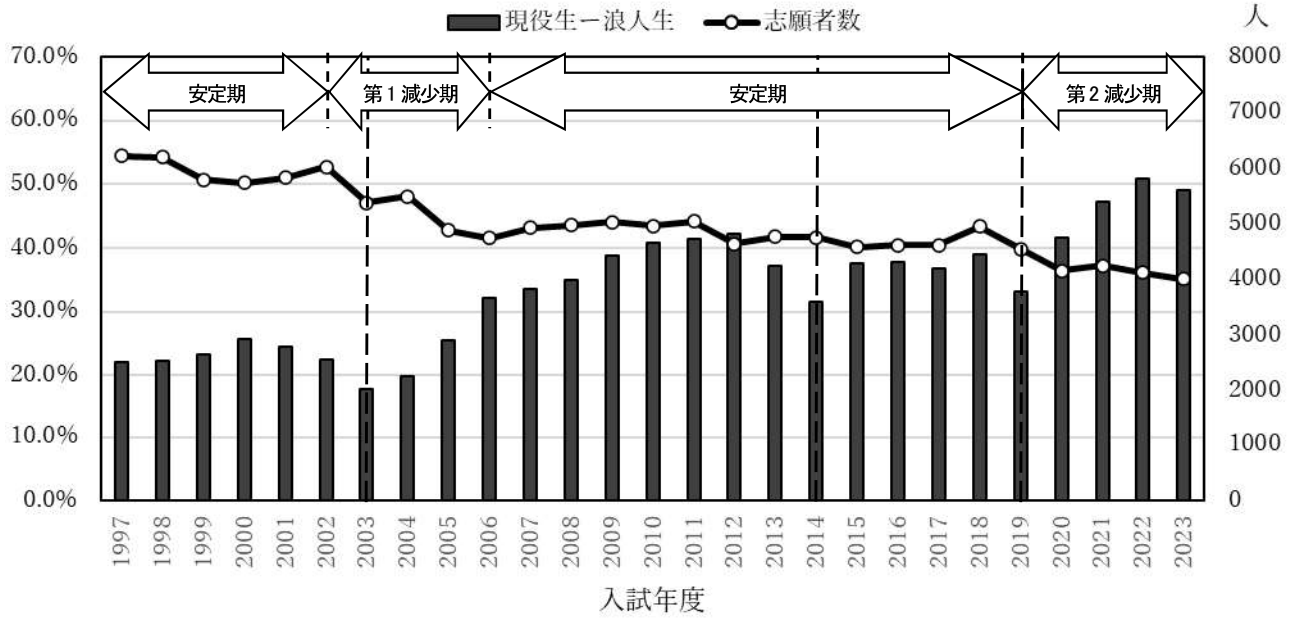

図３　志願者数に占める現役生と浪人生との割合の差

4.3 現役生・浪人生の志願者数の経年変化

次頁の図 4 は，志願者数を現役生と浪人生とに分けて経年変化の推移を示したグラフである。

図 4 から，図 3 で表れた 3 つの谷の前後で表れた現象が，現役生数の増減によるものなのか，或いは浪人生数の増減によるものなのかを考察する。

4.3.1　2003 年度入試の谷

図 4 から，大幅定員減[2]の 2003 年度入試では，現役生が前年比[3]86 ポイント（以下，「ポイント」は省略する），浪人生 95 とどちらも数を減らしたが，現役生の方が影響は大きかったことが分かる。

2005 年度入試（受験科目数を 5‐7 に増加）と 2006 年度入試（学習指導要領改訂および英語リスニングテスト導入）の影響は現役生と浪人生の動向に異なる作用を及ぼした。2004 年度から 2006 年度入試までの間，増減を繰り返しながらも現役生はほぼ横ばいで推移したが，浪人生は年々大幅に数を減らした。このことから，受験科目数の増加が浪人生の数を大幅に減らし，そのことが受験生全体の数の減少に繋がり「第１減少期」をもたらしたと思われる。

（参考）

2003 年度入試：	現役生	前年比 86（523 人減）
	浪人生	前年比 95（125 人減）
2004 年度入試：	現役生	前年比 104（124 人増）
	浪人生	前年比 100（9 人減）
2005 年度入試：	現役生	前年比 93（229 人減）
	浪人生	前年比 83（387 人減）
2006 年度入試：	現役生	前年比 102（70 人増）
	浪人生	前年比 86（207 人減）

2007 年度入試以降の変化の様子も，現役生と浪人生では異なっている。2011 年度入試まで，現役生は志願者数が少しずつ増加した一方で，浪人生は志願者数が少しずつ減少した。東北大学では，2007 年度から 2009 年度入試まで後期日程を廃止 [4]し，前期日程及び AO 入試Ⅱ期・Ⅲ期の定員を増やした時期に当たる。この前期日程の定員増は，現役生の志願者数増をもたらしたが，浪人生の志願者数には影響を及ぼさなかった。その理由は，AO 入試の存在によると推測できる。

AO 入試Ⅱ期は共通試験を利用せず現役生のみを対象とする入試であり，AO 入試Ⅲ期は共通試験を利用し現役生と浪人生（学部によって受験できるのは高校卒業 1 年後までに制限される場合がある）を対象とする入試である。後期日程の廃止は，東北大学を目指す現役生の受験機会を増やしたが，同時に浪人生には受験機会の減少につながった。このことが，受験生に現役生重視の印象をもたらした可能性がある。

2012 年度入試で，現役生が前年比 92（270 名減），浪人生が前年比 91（141 名減）とともに減少しているが，これは東日本大震災の影響による落ち込み（倉元, 2020）であろう。

4.3.2　2014 年度入試の谷

2012 年度から 2014 年度入試の間は，現役生が緩やかに減少し浪人生が増加している。しかし，2015 年度入試（学習指導要領改訂の下での入試を実施）以降は，現役生がほぼ横ばいで推移しているが，浪人生は 2015 年度入試で前年比 88 と大幅な減少を見せて以降ほぼ横ばいに推移している。学習指導要領改訂による内容の変更が浪人生に与える影響は少ないようである。なお，2018 年度入試で現役生の数が増加しているが，これは東北大学が 2017 年 6 月に「指定国立大学法人」に認定されたことによる（データネット実行委員会, 2018）とも言われている。

（参考）

2013 年度入試：	現役生	前年比 99（26 人減）
	浪人生	前年比 112（159 人増）
2014 年度入試：	現役生	前年比 96（146 人減）
	浪人生	前年比 109（130 人増）
2015 年度入試：	現役生	前年比 101（22 人増）
	浪人生	前年比 88（198 人減）
2016 年度入試：	現役生	前年比 101（30 人増）
	浪人生	前年比 100（4 人増）
2017 年度入試：	現役生	前年比 99（20 人減）
	浪人生	前年比 102（23 人増）

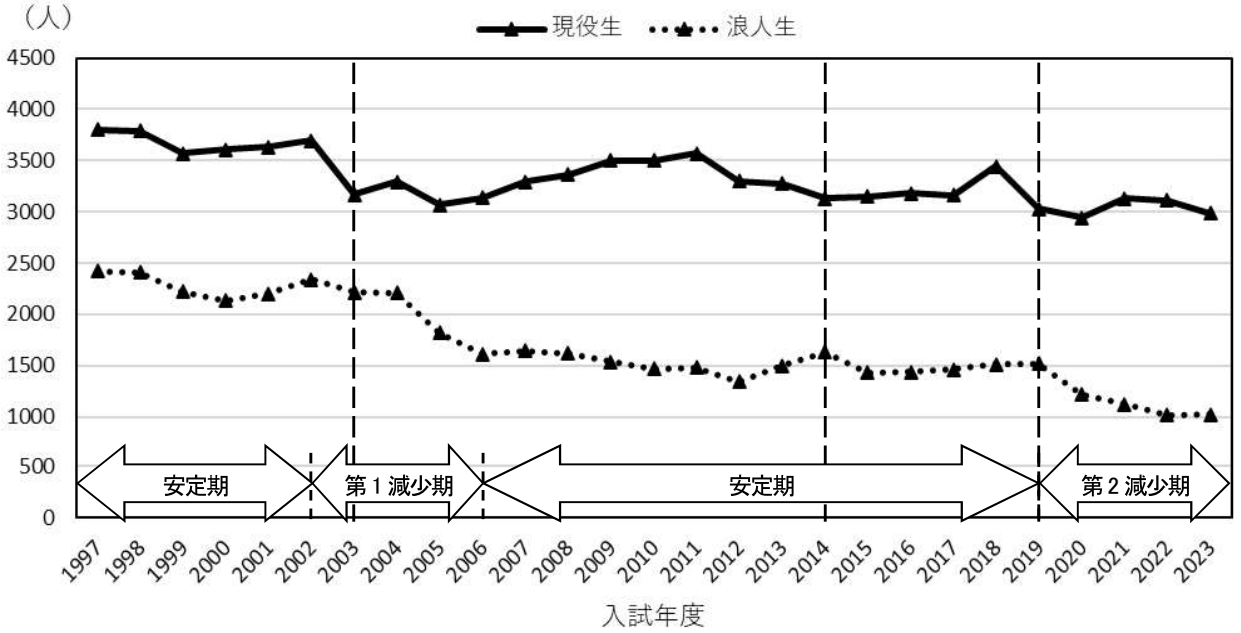

図 4　現役生と浪人生の志願者数の経年変化

4.3.3　2019 年度入試の谷

2019 年度入試までは，現役生・浪人生ともにほぼ横ばいで推移してきたが，2020 年度入試において，浪人生が前年比 80 と大幅に減少しその後もやや減少

している。2020 年度入試は，新傾向問題の「出題傾向がセンター試験に前倒しで出題されることが予想された」（内田・橋本, 2022: 15）年である。

入試制度変更とそれに伴う出題傾向の変化が浪人生の数を大幅に減らし，受験生全体の数の減少に繋がり「第 2 減少期」をもたらしたと思われる。

（参考）

2019 年度入試：	現役生	前年比 89（416 人減）
	浪人生	前年比 101（11 人増）
2020 年度入試：	現役生	前年比 97（83 人減）
	浪人生	前年比 80（306 人減）
2021 年度入試：	現役生	前年比 106（184 人増）
	浪人生	前年比 92（92 人減）

以上から，次のことが考えられる。

「受験科目数の増加」と「入試制度変更とそれに伴う出題傾向の変化」により，浪人生の数の減少がもたらされ，このことが志願者数全体の数の減少に大きな影響を与えていた。

続いて，浪人生の動向をより詳しく分析し考察する。

4.4 浪人生を 1 浪生と多浪生に分けて分析

図 5 は，浪人生の志願者数を 1 浪生と多浪生とに分けて経年変化の推移を示したグラフである。

4.4.1 「減少期」に 1 浪生の数が大幅に減少

図 5 から，1 浪生は，2 つの「減少期」において大幅に数が減少していたが，多浪生の数は，2006 年度入試以降緩やかに減少していたことが分かる。このことから，「減少期」における浪人生全体の数の減少は，主に 1 浪生の数の減少が大きく影響を与えたことが分かる。

（参考）

「第 1 減少期」2002 年度入試に対して

1 浪生	：	39%減少（680 人減）
多浪生	：	8%減少（48 人減）

「第 2 減少期」2019 年度入試に対して

1 浪生	：	31%減少（371 人減）
多浪生	：	9%減少（48 人減）

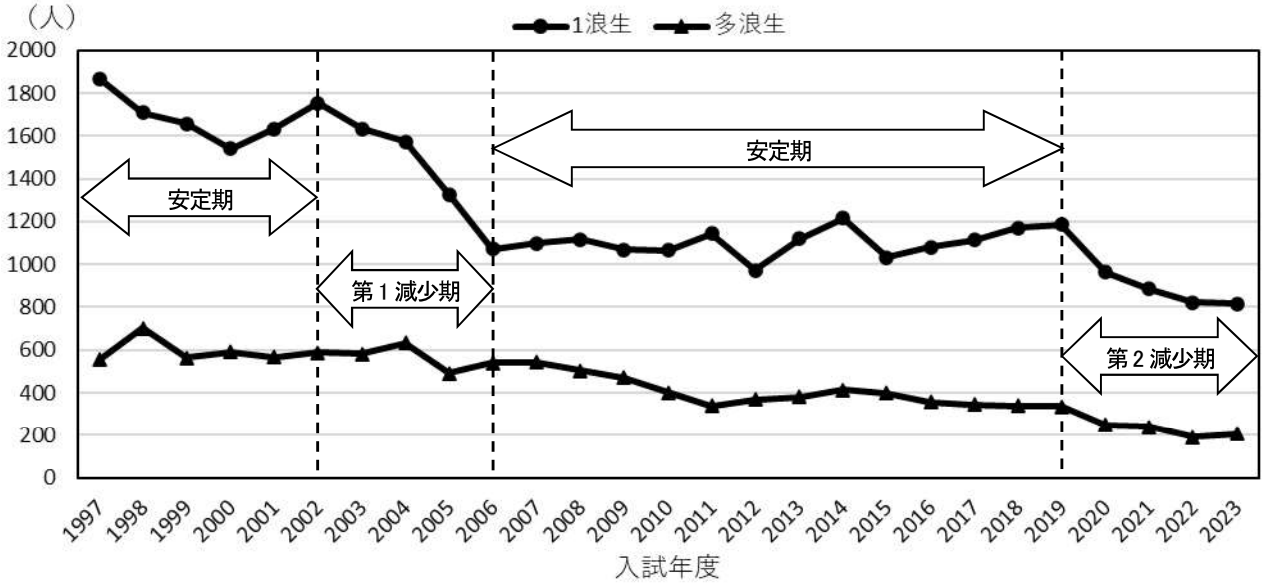

図 5　1 浪生と多浪生の志願者数の経年変化

4.4.2 1 浪生と志願者全体との関係

2 つの「減少期」において，1 年目の浪人の減少が浪人生全体の数の減少に大きな影響を与えていたことがわかった。では，志願者全体の減少に対し，どの程度影響があったのだろうか。

それを知るために，志願者全体の減少数に占める 1 浪生の減少数の割合を計算した。結果は次のとおりである。

「第 1 減少期」

2002 年度入試にからの減少数は，志願者全体が 1286 人で，1 浪生が 680 人であったことより，全体の減少数の内 53%を占めている。

「第 2 減少期」

2019 年度からの減少数は，志願者全体が 541 人で，1 浪生が 371 人であることより，全体の減少数の内 69%を占めている。

このように，どちらの「減少期」においても 1 浪生の占める割合は高い。

ただ，「第 1 減少期」の結果は，2003 年度入試（定員数減）において現役生の数の減少（2002 年度より 523 人減）が大きいため，必ずしも「受験科目数の増加」のみがもたらした結果を表してはいないと考えられる。そこで「定員数減」の影響を除くために 2003 年度から 2006 年度入試の間について計算する。

「第 1 減少期」（「定員数減」の影響を除く）

2003 年度入試からの減少数は，志願者全体が 638 人で，1 浪生が 561 人であることより，全体の減少数の内 88%を占めている。

この結果から，「第 1 減少期」においては「科目数の増加」が，「第 2 減少期」においては「入試制度変更とそれに伴う出題傾向の変化」が 1 浪生の数の減少をもたらし，さらに志願者数全体の減少にも大きな影響を与えたことが分かる。

4.4.3 1 浪生の減少が志願者全体の減少に大きく関わっていた

図 6 は，1997 年度入試の志願者数を 100 としたときの，全体の志願者数と 1 浪生の志願者数がそれぞれどのように経年変化をしてきたのかを示したグラフである。

図 6 からは，全体の志願者数と 1 浪生の数の変化がほぼ同期してきたことが分かる。そして，この図 6 からも，全体の志願者数の経年変化に表れた 2 つの「減少期」は，1 浪生の減少の影響によるものと考えられる。

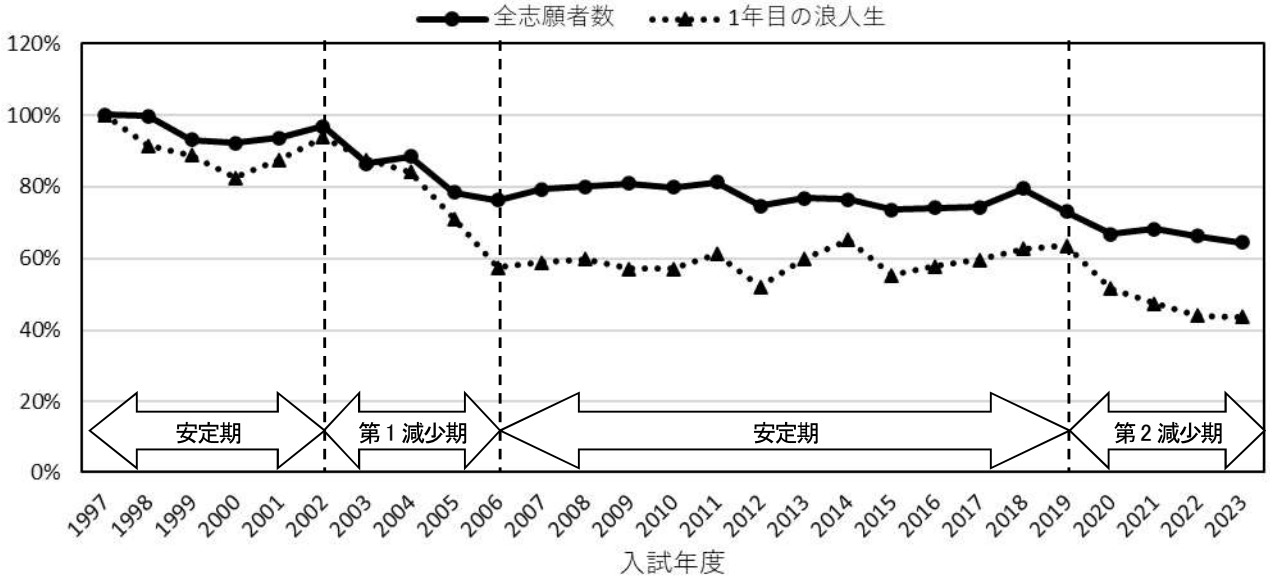

図 6　1997 年度入試を 100 としたときの全体の志願者数と 1 年目の浪人数の各年度の割合

5 まとめ

本研究では，東北大学一般選抜前期日程のデータを用いて，志願動向の変化の要因について探った。

その結果，東北大学の志願者数の動向について次の 3 つのことがわかった。

1. 18 歳人口減少の影響はあまり大きくなかった
2. 1 浪生の減少が，全体の志願者数の減少をもたらした
3. 1 浪生の減少は，「受験科目数の増加」と「入試制度変更とそれに伴う出題傾向の変化」によってもたらされた

一様に「現役志向」「安全志向」と言われてきたが，少なくとも東北大学を志願する受験者にはより複雑な要因が働いていることがわかった。図 4 から分かるように，2003 年度入試以降の現役生の志願者数はほぼ横ばいで安定的に推移していた。そして，図 5 か

ら分かるように，1 浪生の数も 2 つの「減少期」を除けば，ほぼ横ばいで推移していた。これらのことから次のことが言えるのではないだろうか。

東北大学を目指す受験生は，これまで常に，浪人を覚悟して志願していた。しかし，「受験科目数の増加」や「出題傾向の変化」が，東北大学に挑戦したいという思いをもった受験生の志を変えさせてきたように見える。

高校 3 年間の学校生活で行事や部活動に精一杯取り組み，卒業の春に惜しくも第一志望の大学に届かなかった受験生が数多くいた。その後，1 年間の浪人生活を通して精神的にも学力的に大きく伸長し，第一志望の大学に合格して行った多くの受験生の姿を，多くの高校教員が目にしてきたことだろう。しかし本研究の結果から，「浪人を避け，涙を呑んで第一志望の大学をあきらめた受験生が多くいた期間があった」とも言える。なお，AO 入試の拡充もこの傾向に拍車をかける要因になったと思われる。

今回の研究では，東北大学全体の動向について，現役生と 1 浪生，多浪生について分析した。今後は，地域ごとや学部ごとの動向についても同様の分析を試みたい。

注

1）「一般選抜」「一般入試」という名称が繰り返し使用されてきたが，2021 年度入試以降は「一般選抜」という名称であるため本稿では「一般選抜」という名称を使用。

2）定員の大幅減：2003 年度入試において，東北大学全体の定員を 80 名減らした。前期日程では，次の 3 つの学部が定員を減らした。

教育学部：70 名→60 名（10 名減）
法学部：180 名→130 名（50 名減）
工学部：576 名→536 名（40 名減）

3）「前年比」とは，前年の志願者数を 100 としたときの，その年の志願者数の割合である。

4）後期日程廃止

2007 年度入試：医学部医学科，歯学部，工学部，農学部
2008 年度入試：教育学部，法学部，医学部保健学科
2009 年度入試：文学部

参考文献

厚生労働省 (2023). 「人口動態当家速報（令和5年1月分）」（https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/s2023/01.html.，最終閲覧日2023年4月23日）

中央教育審議会大学分科会 (2023). 「『学修者本位の大学教育の実現に向けた今後の振興方策について』（審議まとめ）（令和5年2月24日）」（https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360_00013.html.，最終閲覧日2023年4月23日）

大学入試センター(2020). 「大学入試センター試験　志願者数・受験者数等の推移」（https://www.dnc.ac.jp/center/suii/suii.html.，最終閲覧日2023年4月23日）

大学入試センター(2022). 「大学入学共通テスト　志願者数・受験者数等の推移」（https://www.dnc.ac.jp/kyotsu/suii/suii.html，最終閲覧日2023年4月23日）

大学入試センター(2023). 「令和５年度大学入学共通テスト実施結果の概要」（https://www.dnc.ac.jp/kyotsu/shiken_jouhou/r5/，最終閲覧日2023年4月23日）

内田照久・橋本貴充 (2022). 「転換期の共通試験の受験者動向―センター試験から共通テストへ―」『日本テスト学会誌』**18**(1), 1－16.

倉元直樹 (2013). 「志願動向の隔年減少抽出の試み――時系列データ解析の適用――」『大学入試研究ジャーナル』**23**, 37－43.

倉元直樹 (2020). 「共通1次からセンター試験への改革は受験生と大学に何をもたらしたのか」『変革期の大学入試』,21－49

データネット実行委員会 (2018). データネット2018 (https://dn-sundai.benesse.ne.jp/dn/dn2018/index.html, 最終閲覧日2023年4月26日）